



本人が物語風に綴る闘病記

44歳で甲状腺がんと中咽頭がんが見つかりましたが、
中2の娘が「大したことないやん」と言うので。

著：原 利彦（1972年 生まれ）

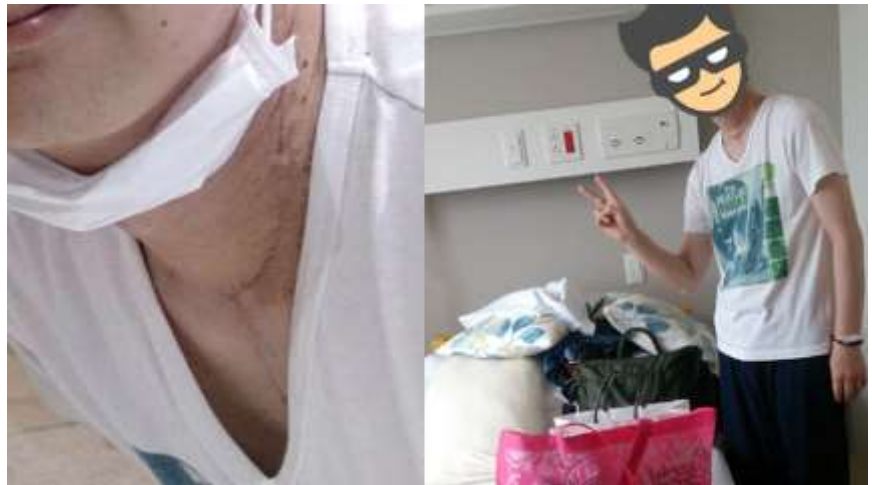


中咽頭がん 治療編3 061：これが、トキにとっての『普通』になる。

2017年7月10日（月） 治療終了から21日目 九州がんセンター 退院

いよいよ、トキは退院します。頸の痕もかなり薄くなりました。

ただし、放射線治療の効果が、わかるのは治療後1か月後です。その結果によっては、後が大きく変わってきます。今回の退院は、がんが治ったからではなく、治療を終え、副作用が多少、落ち着いたからです。当分は自宅で安静となります。



トキの副作用の現状は・・・

甲状腺全摘・頸部両リンパ節郭清（甲状腺がん） ※プラス、ヨード治療を数か月後に予定。

◆左手が肩より上に上がらない ◆頸周りの締め付け、こわばり ◆頸周りの皮膚の感覚がない ◆食事の飲み込みが困難	時間経過とリハビリ次第で治る見込みもあり
◆手足の先がしびれる ◆体温調節がうまくいかない	生涯、薬で調整

抗がん剤治療（中咽頭がん）

◆味覚障害（20%程回復）	数年で回復する見込み
◆しゃっくり ◆吐き気、倦怠感 ◆便秘 ◆微熱 ◆食欲不振	済

放射線治療（中咽頭がん）

◆脱毛 ◆口内炎	数か月で回復する見込み
◆唾液腺障害（口腔内乾燥）	生涯、現状維持
◆口腔内の免疫低下	生涯、ケアが必要

この状態で世に出て、以前と同じく『普通』に生きていくのは困難ですが、
これからは、これが、トキにとっての『普通』になるのです。

さて、後輩のムタさんともお別れです。そう、トキと同じ病室の83才のおじいさんです。

同じ治療をトキは、ムタさんより3週間ほど早く始めていましたことから、ムタさんは自分の息子より若いトキのことを『先輩』と呼びました。ムタさんの唯一の楽しみは、ラジオでした。それは視力も聴力もかなり衰えているため、テレビも新聞も、ままならないからです。トキも何度か病院の書類を大きな声で読んであげました。毎朝、病院の庭を一緒に散歩して、ベンチに座り、色んなことを話しました。

ムタさんは7年前に奥さんをこの病院で看取って以来、一軒家で一人暮らしをしながら、毎日、今日1日、何をするかを考えるのが日課だそうです。そんなムタさんから、トキは、こう言われました。

「なあ、先輩、今日が最後やね。あんたが友達になってくれて良かった。ありがとうね、でも、もう、ここでは二度と会わんようにしようね。ここを出た後、僕は家に帰ればいい。だけど、あんたは、まだ若いけん社会に戻らないかん。だけん、頑張って生きないかん、生きないかんよ。」

トキは必死で涙を堪えました。ムタさんも必死で涙を堪えました。お互いに明日から、どんな日々を過ごすのか気になります。それを知る術はありませんが、ここでムタさんと出会い、過ごした時をトキは一生、忘れることはないでしょう。トキは心の中でムタさんに話しました。

『ムタさん、歳には勝てません、でも、病気には勝ちましょう。「生きないかん」あなたがくれた、その言葉を胸に少なくとも僕は、あなたと同じ83歳まで生きてみせます。』

⇒ 062：再び、3大副作用悪化の危機が。